

宮崎市文化財調査報告書 第77集

おお や しき い せき
大 屋 敷 遺 跡

防火水槽新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

宮崎市教育委員会

序

本書は、宮崎市大字跡江宮ノ馬場における防災まちづくり事業（防火水槽新設工事）に伴い、宮崎市教育委員会が平成16年5月から平成16年6月まで発掘調査を実施した、大屋敷遺跡の発掘調査報告書です。

大屋敷遺跡は、北東に大淀川が流れ、南西に跡江台地を臨む平地に立地し、跡江神社に隣接した、住宅地に囲まれた遺跡です。

本遺跡周辺の平地および跡江台地には、縄文時代から中世までの多数の遺跡が存在しており、古来より、人々にとって住みよい土地であったことがうかがえます。

そのなかでも生目古墳群は市制70周年記念事業の一環として、平成5年から保存整備事業に着手し、今年度、史跡公園として供用を開始するに至りました。この公園を中心として、多くの方に歴史ロマンを実感していただくとともに、この報告書によって本遺跡の重要性を再認識され、本遺跡と生目古墳群との関連について理解を深めていただくことの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご協力いただいた関係機関の皆様、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成21年3月

宮崎市教育委員会

教育長 田原 健二

例 言

1. 本書は防災まちづくり事業（防火水槽新設工事）に伴う、宮崎県宮崎市大字跡江宮ノ馬場に所在する大屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が実施した。現地調査は平成16年5月6日～平成16年6月30日の期間実施した。また整理作業は平成16年9月21日～平成16年10月21日の期間実施した。
3. 調査組織（平成16年度）

調査主体 宮崎市教育委員会

文化振興課	課長	小掠 聖
調査総括	文化財係長	米良 明信
調査事務	主 事	松木 勇道
調査担当	主任技師	宇田川美和
	嘱 託	井上 誠二
補助員	嘱 託	永友加奈子（整理担当）
		◇ 稲元久美子（◇）
		◇ 徳丸 理奈（◇）

現場作業員

4. 掲載した図面のうち、現場における実測は井上が現場作業員の協力を得て行った。遺物の実測は永友・稲元・徳丸が行った。
5. 現場および遺物の写真撮影は井上が行った。
6. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
SA：堅穴住居 SC：土坑 SE：溝状遺構 SH：ピット
7. 本書の実測図で~~○~~は焼土である。
8. 本書の図で使用する座標は日本測地系であり、方位記号はすべて真北を指す。
9. 本書の執筆、編集は井上が行った。
10. 出土遺物および掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会が保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 遺跡の立地と環境	1
第Ⅱ章	調査成果	
	第1節 調査成果の概略	5
	第2節 遺構について	
	a. 竪穴住居	5
	b. 土坑	11
	c. その他の遺構	14
第Ⅲ章	まとめ	15

挿図目次

第1図	周辺遺跡位置図	2
第2図	調査区周辺図	3
第3図	調査区全体図	4
第4図	1号竪穴住居実測図	5
第5図	2号竪穴住居実測図	6
第6図	1・2号土坑実測図	7
第7図	2号竪穴住居出土遺物	7
第8図	1・2・3号土坑出土遺物	8
第9図	3号竪穴住居・竈実測図	9
第10図	4号土坑実測図	10
第11図	3号竪穴住居出土遺物	10
第12図	5号土坑・埋甕実測図及び出土遺物	12
第13図	6・7号土坑実測図	12
第14図	6号土坑出土遺物	13
第15図	ビット状遺構出土遺物	14

図 版 目 次

図版 1～12 現地調査	17
図版 13～28 出土遺物	19

表 目 次

表 1 遺物観察表	16
-----------------	----

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成15年4月23日、宮崎市消防局警防課より、防災まちづくり事業（防火水槽新設工事）に伴い、宮崎市大字跡江宮ノ馬場812番地（跡江神社西側）における埋蔵文化財の所在の有無の照会が宮崎市教育委員会文化振興課（現、宮崎市教育委員会文化財課）に提出された。これを受けて文化振興課では、当該地区が、周知の埋蔵文化財包蔵地「大屋敷遺跡」であることから、埋蔵文化財の有無を確認する確認調査が必要であると回答し、平成15年6月5日に確認調査を行った。

確認調査の結果、対象地区内で土師器片が出土し、竪穴住居址や柱穴が検出されたため、開発に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨を伝えた。

その後、文化振興課と消防局警防課との間で協議を重ね、本調査を実施した。調査期間は平成16年5月6日から平成16年6月30日までである。

第2節 遺跡の立地と環境

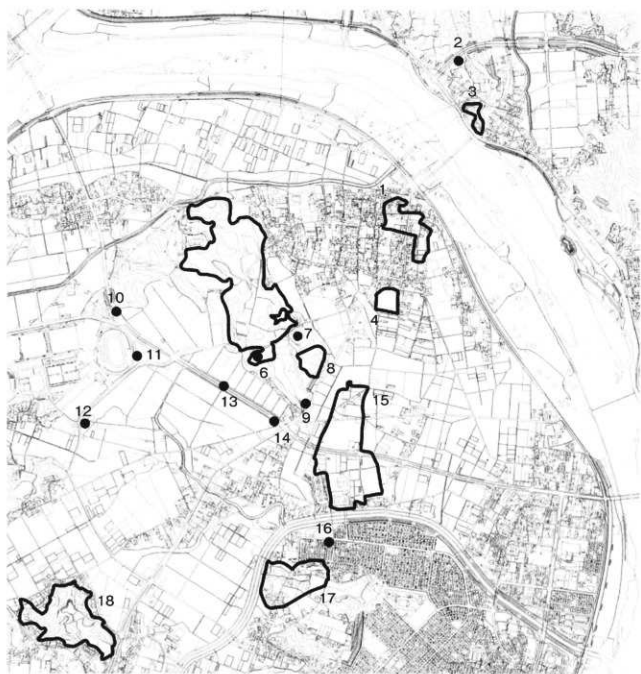
大屋敷遺跡は宮崎市西部、大淀川と大淀川右岸に位置する跡江丘陵との間の標高約10mの微高地に所在する。本遺跡は平成元年度に宮崎市教育委員会が実施したりゾート地域を中心とした市内全域の遺跡詳細分布調査報告の中で、「大屋敷遺跡」として報告されており、周知の遺跡となっていた。

本遺跡の周辺には跡江丘陵上の生目古墳群をはじめ、各時代の遺跡が多数所在している。縄文時代では、跡江丘陵南東端部に跡江貝塚が所在し、縄文時代早期の押型文土器・糸ノ神式土器など多種にわたる土器が出土している。また本遺跡から北東へ約600mの大淀川をはさんだ対岸に同じく縄文時代早期の柏山貝塚が所在する。弥生時代では、跡江丘陵上の南東部に弥生時代中期の環濠集落が確認された石ノ迫第2遺跡が所在し、弥生時代中期の集落のほか、土坑墓群、古墳時代の地下式横穴墓、円墳の周溝6基（生目古墳群指定墳45～50号）が確認されている。

古墳時代に入ると、跡江丘陵上とその周辺において生目古墳群が造られる。生目古墳群は前方後円墳8基、円墳43基からなる古墳時代前期を中心とする古墳群である。宮崎市制70周年記念事業の一環として、平成10年度より史跡整備に伴う発掘調査が行われており、平成20年4月1日に史跡公園として開園した。現在も史跡整備事業が進行中である。跡江丘陵から南東約600mの位置には開越遺跡が所在しており、弥生時代後期後葉、古墳時代中期～後期の集落が確認され、古墳時代の竪穴住居30軒余りを始めとして掘立柱建物、土坑、溝状遺構、地下式横穴墓が検出されている。

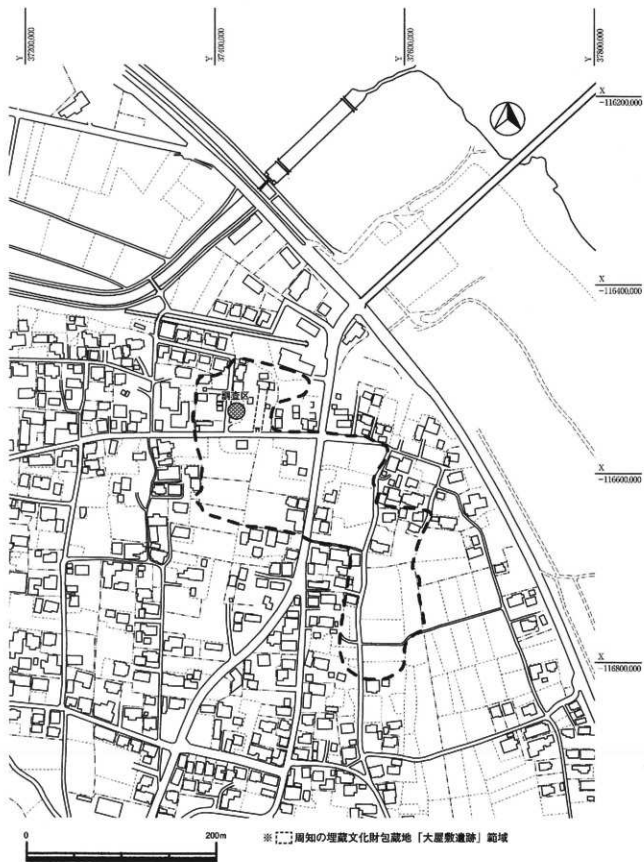
古墳時代以降の遺跡では、本遺跡から南西に1500m、現在、生目の杜スポーツ公園が立地する場所に深田遺跡が所在する。深田遺跡は、古代の掘立柱建物、土坑、溝状遺構、井戸や近世の掘立柱建物、欄列、土坑などが検出された集落遺跡である。また中世に入ると、跡江丘陵上南東部に跡江城が築かれる。

さらに、本遺跡と跡江台地にかけての平地には江戸時代における庚申塔・供養塔が点在していることから、本遺跡周辺は古来より連絡と人々にとって住みよい土地であったことがうかがえる。

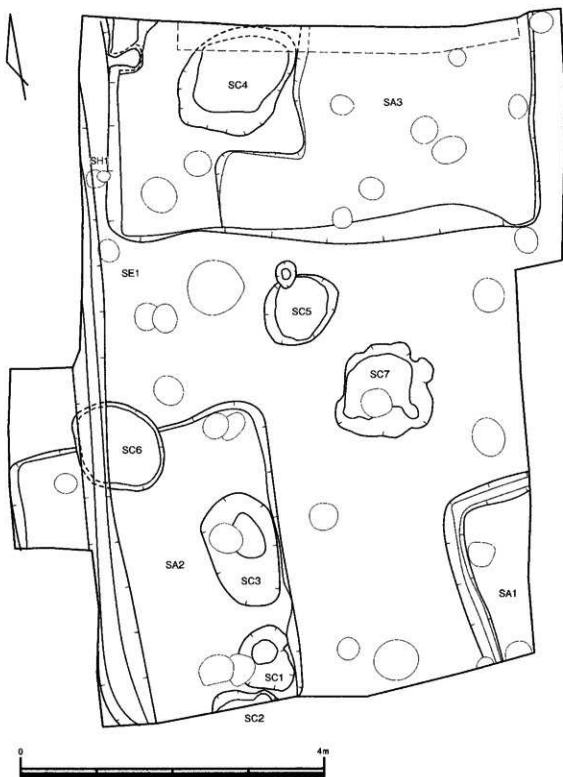


- | | | | |
|---------|-----------|----------|-----------|
| 1 大屋敷遺跡 | 6 石ノ迫遺跡 | 11 深田遺跡 | 16 平岩墓地遺跡 |
| 2 笠置遺跡 | 7 石ノ迫第2遺跡 | 12 八反田遺跡 | 17 平岩遺跡 |
| 3 柏田貝塚 | 8 跡江城 | 13 沖ノ田遺跡 | 18 石塚城跡 |
| 4 堂原遺跡 | 9 跡江貝塚 | 14 雀田遺跡 | |
| 5 生目古墳群 | 10 井尻遺跡 | 15 間越遺跡 | |

第1図 周辺遺跡位置図 (S=1/20,000)



第2図 調査区周辺図 (S=1/4,000)



第3図 調査区全体図 (S=1/50)

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査成果の概略

調査区全体で、竪穴住居3軒、土坑7基、ピット33基、溝状遺構1条及びこれらに伴う遺物を検出した。調査区南側は一部で現代のゴミ穴が点在し、地山直上付近まで深く削平を受けているが、面的に削平を受けているところはなく、比較的良好な状態で層序を確認することができた。

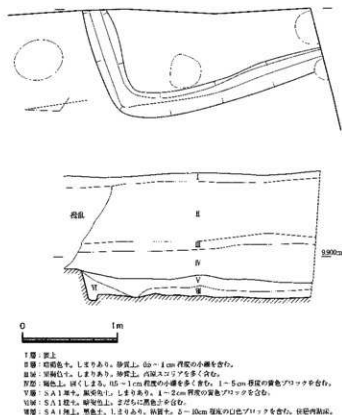
基本層序はⅠ層表土、Ⅱ層暗褐色、Ⅲ層に黒褐色の高原スコリアを多く含むスコリア層が堆積し、Ⅳ層に褐色上、Ⅴ層に黒褐色上が堆積する。Ⅵ層に褐色のローム層があり、本調査区での地山となる。遺構埋土はⅣ、Ⅴ層となるものの、重機による表土剥ぎの段階でⅣ層のほとんどを除去してしまい、結果、遺構検出は地山上面での検出となった。

第2節 遺構について

a. 竪穴住居

1号竪穴住居 (SA1) (第4図)

調査区南東端で一部を検出した竪穴住居である。一部検出であるため、規模等不明であるが、床面までの深さは約30cmを測る。床面には貼床を施し、床面立ち上がり付近に幅約15cm、深さ約5cm程度の壱帯溝が巡っている。遺物は土師器片が数点出土しているものの小片のため、時期は不明である。



第4図 1号竪穴住居実測図 (S=1/40)

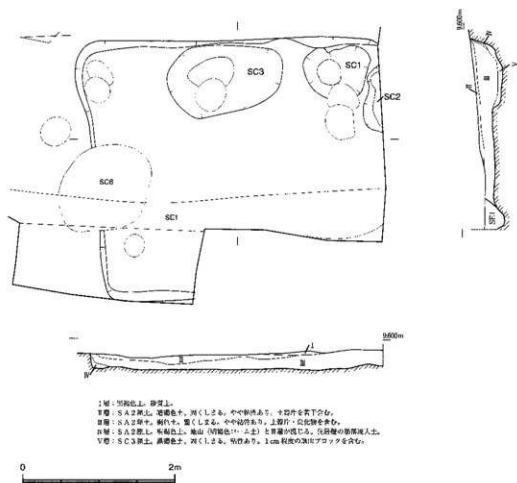
2号竪穴住居（SA2）（第5図）

調査区南西端で一部を検出した竪穴住居である。西側は南北に走る溝状遺構に切られており、北側はSC1（土坑）に切られた状態で検出した。全面検出ができていないため、プランは不明確ではあるが、現状から推測するに短軸約3.4m、長軸約3.8m以上の隅丸の長方形プランと考えられる。また住居内には土坑が3基検出され、3基とも住居床面から掘り込まれている検出状況から住居に伴う土坑と考えられる。そのうち1・2号土坑からは焼土が検出されている。

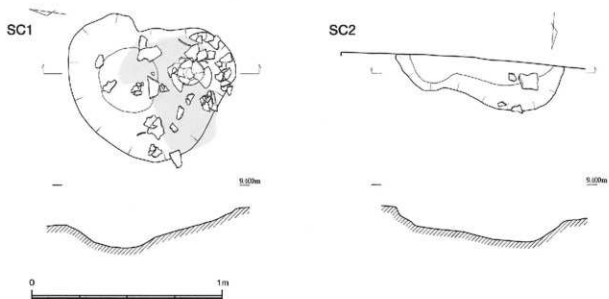
1号土坑（SC1）（第5・6図）住居内南東隅に位置し、床面から掘り込まれている土坑である。プランは0.9m×0.7mの不整形な楕円形で住居床面検出時から広く焼土を伴う埋土であった。深さは0.2mである。土坑内からは完形の高環が逆さまに立ち、焼土をまとう形で出土している。

2号土坑（SC2）（第5・6図）住居内南東隅、SC1の西隣に位置し、SC1と同じく埋土中に焼土を伴う土坑である。調査区に切られ、一部検出のため、プランは不明であるが、深さは0.1mである。

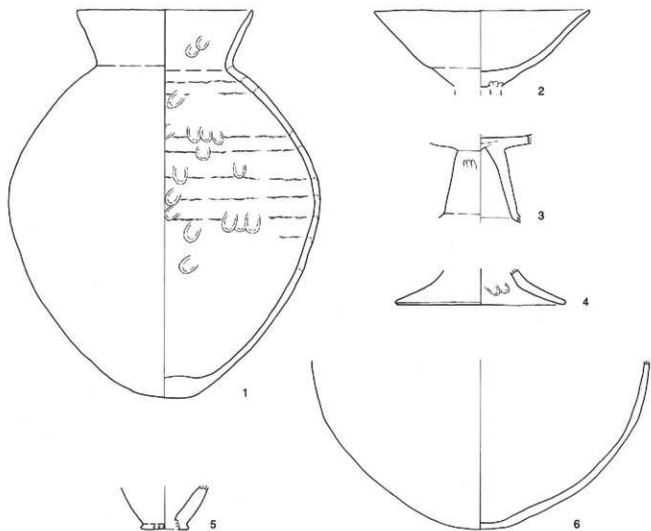
3号土坑（SC3）（第5図）住居内東側、SC2の北側に位置する住居内土坑である。プランは1.5m×0.9mの楕円形で深さ15cmである。先の2基とは異なり、埋土中に焼土を含まない。



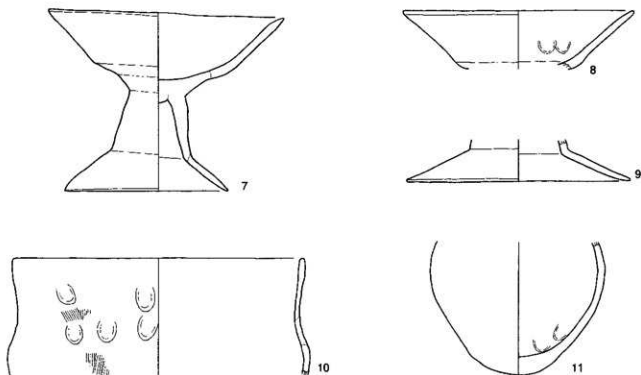
第5図 2号竪穴住居実測図（S=1/50）



第6图 1·2号土坑实测图 (S=1/20)



第7图 2号竖穴住居出土遗物 (S=1/3)



第8図 1・2・3号土坑出土遺物 (S=1/3)

【遺物】

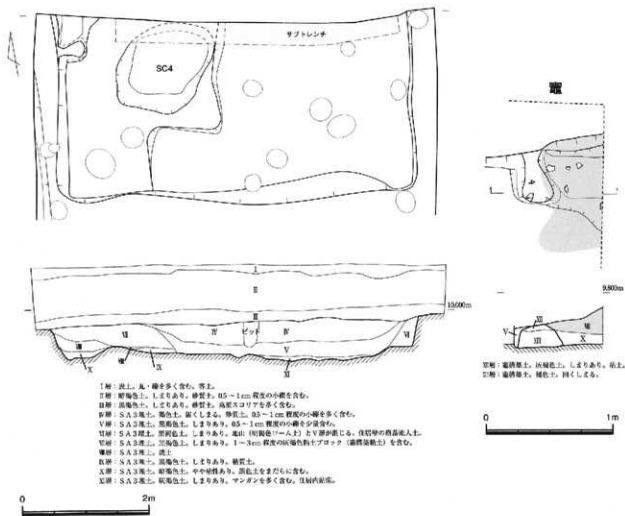
1～6は2号竪穴住居内で出土した遺物である。1は5世紀中葉～後葉の大型壺である。口縁部がわずかに外反し、底部は丸底に近い尖底である。内外面とも全体的にナデであるが、外面胴部下半は比較的丁寧なナデに施している。底部付近には煤が付着する。内面には指オサエのあとが多数残り、粘土の継ぎ目が明瞭に残る。2～4は5世紀中葉～末の高坏である。2は坏部であり、外面は横方向にナデを施される。内面は摩滅が激しく、調整等判然としない。3は脚部であり、内外面とも横方向にナデを施し、内面には指オサエも見られる。4は脚部である。外面は横方向に丁寧なナデと、一部ミガキを施す。5は甕の底部である。外面に押し刻みを施し、本遺構出土の遺物の中ではやや古い様相を呈す。6は大型壺の底部である。器壁が薄く、丸底である。内外面とも摩滅が激しく、調整等判然としない。底部のみの出土であるため細かな時期の比定はできない。7～11は2号竪穴住居内土坑から出土した遺物である。7～9は1号土坑で出土した高坏である。7は完形であり、内外面ともナデを施す。5世紀中葉に比定される。8は坏部である。内面にわずかに指オサエのあとが見られるのみで、内外面とも摩滅が激しく、調整等判然としない。9は脚部である。本遺構の他の高坏と比べ、脚柱部との境の後縁が明瞭に残る。5世紀前葉～中葉に比定される。10は2号土坑から出土した5世紀後葉～6世紀前葉の中型長胴甕である。外面は胴部張り出し部に煤が付着しており、調整は全体的にナデが施され、一部ハケが見られる。11は3号土坑から出土した中型壺である。外面はハケ後ナデ、内面はナデを施す。後述する7号土坑出土遺物と接合関係にある。

3号竪穴住居（SA3）（第9図）

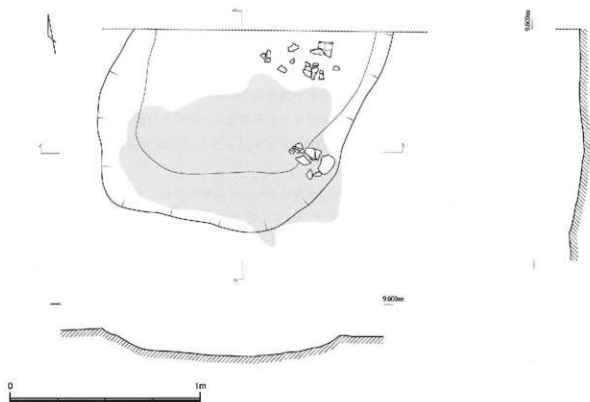
調査区北側ほぼ全面で一部を検出した竪穴住居である。他の住居同様、全面を検出できていないため、プランは不明であるが、一辺が約5.6mの隅丸方形プランと推測できる。床面は、ほぼ中央部で西側から東側にかけて掘り込まれており、その分、東側には貼床が施されている。床面からはピットが幾つか検出されているが、深さが一致しないことと住居跡の全体プランが不明なことから、柱配列は判然としない。住居西側、調査区北西隅において住居内竈が一部分検出されている。また、西側床面からは住居内土坑1基が検出された。

竈（第9図）住居跡西側に付設されており、焚口は東に向く。一部検出なので詳細は不明であるが、奥行き約38cm、左袖の残存高約17cmを測る。遺構検出時は広く焼土に覆われていた。

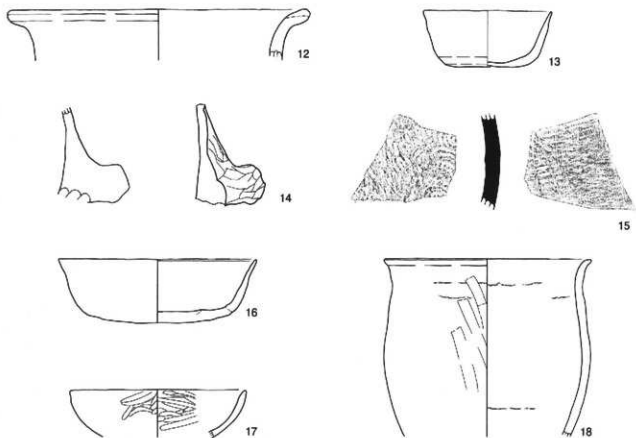
4号土坑（SC4）（第9・10図）竈の東隣に位置する土坑である。土坑は一部検出であるが、一辺約1.3mの不整形な円形を呈し、土坑埋土中に広い範囲で焼土が確認できた。検出の状況から3号竪穴住居に伴う土坑と考えられる。



第9図 3号竪穴住居実測図（S=1/60）及び竈実測図（S=1/30）



第10图 4号土坑实测图 (S=1/20)



第11图 3号竖穴住居出土遗物 (S=1/3)

【遺物】

12～15は3号竪穴住居から出土した遺物である。12は甕である。内外面とも調整はナデによるものと思われる。13は定形の坏であるが、内外面とも摩滅が激しく、調整等判然としない。14は甕の把手部である。胎土に径3mm程度の粒子を多量に含み、やや作りが荒い。胴部とのあいだには粘土接合痕が残る。15は須恵器甕の胴部片である。外面にはタタキ、内面には同心円文の当て具による調整が施されている。16は3号竪穴住居より出土した坏身である。須恵器模倣の坏であり、時期は7世紀後半～8世紀前半と考えられる。17・18は3号竪穴住居内土坑（4号土坑）から出土した遺物である。17は坏である。外面にはミガキを施す。18は小型の長胴甕であり、調整は外面に板状工具によるナデ調整が施されている。

b. 土坑

5号土坑（SC5）（第12図）

調査区ほぼ中央、SA2とSA3との間に位置する土坑である。プランは約1×1mの楕円形で深さは15cm程度である。他の土坑と違い、焼土を含まない。また北側の立ち上がりの一部、埋甕の掘方に切られる形となっている。

埋甕（第12図）SC5を切って掘り込まれている埋土中に口縁部、底部を欠いた胴部だけの甕が埋設されている。埋甕の外側の埋土中には焼土が見られるが、内側の埋土中には見られない。おそらく住居内に設置された埋甕炉と考えられるが、周辺を精査しても住居の痕跡は見られなかった。

6号土坑（SC6）（第13図）

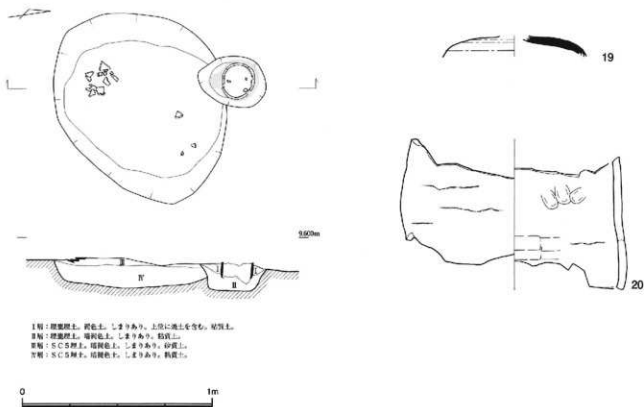
調査区中央の西端、SA2の北側を一部切る形で検出した土器焼成土坑である。プランは約1.1×1.1mの楕円形で深さは10～13cm程度と比較的浅い。埋土中は焼土を多量に含み、土器片が多く出土している。

7号土坑（SC7）（第13図）

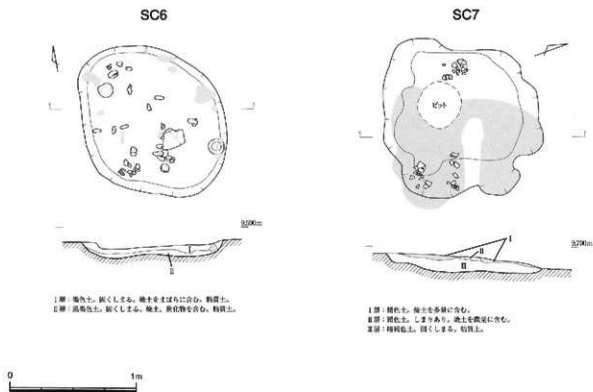
調査区のはほぼ中央、SA1の北側に位置する土坑である。プランは約1.2×1.2mの不整形な円形で深さは10～12cm程度である。埋土表面に広い範囲で焼土が確認できるが、用途は不明である。しかし、この土坑内から出土した土師器片がSA2内で出土した土師器と接合関係にあった（遺物No11）ことから、SA2に伴う、住居外施設であったと考えられる。

【遺物】

19は5号土坑から出土した須恵器の坏甕である。内外面とも摩滅が激しく、調整等判然としない。20は甕である。長胴甕の口縁部と底部を打ち欠き、住居内に設置されかとして使用されたと考えられる。外面にはナデ、内面には板状工具によるナデが施されている。古墳時代における住居内埋甕は、今塩屋氏によって「土器埋設炉」として分類・時期変遷が行われている。それによると、木道跡の埋甕は、甕の形態、掘り方、焼土の状況等からV-b類に位置づけられると考えられ、時期は6世紀後半～7世紀前半となる。

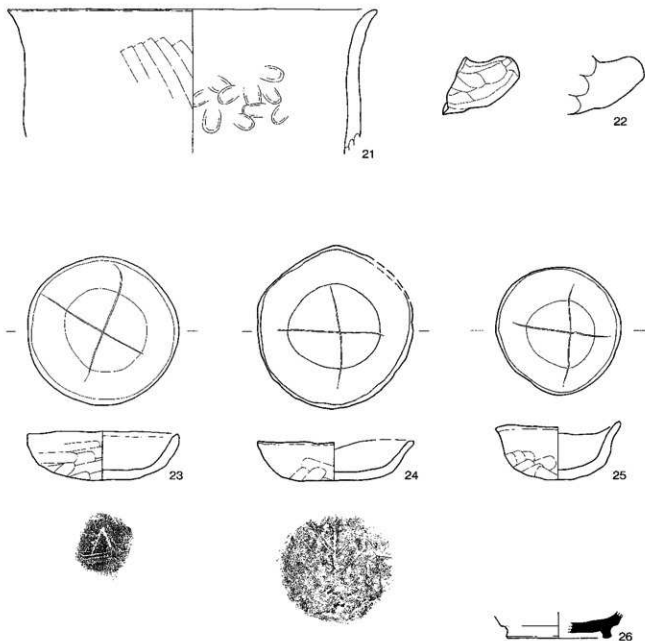


第12図 5号土坑・埋藏実測図 (S=1/20) 及び出土遺物 (S=1/3)



第13図 6・7号土坑実測図 (S=1/30)

21～26は6号土坑から出土した遺物である。21は甔である。外面は板状工具によるナデを施す。内面はナデを施し、指頭圧痕が残る。22は甔の把手部である。胎土が21と類似するため、同一個体と思われる。23～25は完形の埴である。3個とも外面は板状工具によるナデを施し、内面底部に十字のヘラ印が施されている。23は外面底部にもヘラ印を施し、24は外面底部に木の葉痕が残る。時期は3個とも7世紀後葉～8世紀前葉に比定される。26はTK48型式以降の須恵器の椀である。高台の付く底部であり、調整は内・外面ともナデを施す。時期は7世紀後葉～8世紀前葉に比定される。



第14図 6号土坑出土遺物 (S=1/3)

c. その他の遺構

1号溝状遺構（SE1）（第3図）

調査区西端に位置し、南北に走る溝状遺構である。検出状況からSA2を切って、SC6に切られる形となっている。幅約40cm、深さ約20cmである。遺物は土師器片が数点出土しているが、いずれも小片のため時期の特定に至る物はない。しかし、遺構の切り合い状況から6世紀前葉～7世紀後葉の幅に収まると考えられる。

ビット状遺構（SH）（第3図）

調査区内で33基のビットを検出している。しかし、遺物はほとんど出土しておらず、埋土・規模ともにばらつきが多いため、同一時期の掘立柱建物と考えられる並びは確認できない。竪穴住居の柱穴にしても、本調査区において、3基の竪穴住居とも全面検出ができていないため、断定できない。

【遺物】

27・28はSH1出土した遺物である。27は須恵器碗である。内外面とも回転ナデを施し、底面に糸きり痕がみられる。28は陶磁器碗である。内外面に軸を施す。



第15図 ビット出土遺物 (S=1/3)

第三章 まとめ

本調査区では、73㎡と限られた面積ながら、竪穴住居3軒、土坑7基、ピット33基、溝状遺構1条及びこれらに伴う遺物を検出した。竪穴住居に関しては、3軒とも全面検出には至らなかった。しかし、2軒で住居に伴う遺物が出土し、2号竪穴住居は5世紀中葉～後葉、3号竪穴住居は7世紀後葉～8世紀前葉にそれぞれ比定される。

土坑に関しては、1・2・4・6・7号土坑で埋土中に焼土が確認でき、中でも、1・4・7号土坑では、検出面において広い範囲で焼土がみられた。1～3号土坑は2号竪穴住居に伴う住居内土坑である。4号土坑は、3号竪穴住居に伴う住居内土坑である。7号土坑は、単独で検出されているものの、埋土中から出土した土器片が、2号竪穴住居埋土中より出土した壺と接合関係にあったことから、7号土坑は、2号竪穴住居と時期を同じくした住居外施設と考えられる。5号土坑は、埋土中に須恵器片を含む単独の土坑である。それを切って掘り込まれている埋燵炉は先述したとおり、住居内に設置されたと考えられるが、それに伴う住居の痕跡は確認できなかった。6号土坑は、埋土中に焼土や粘土塊を含み、熱により変形した不良の土師器片の出土があることから、土器焼成土坑と考えられる。時期は出土した土器器坏などから、3号竪穴住居と近い時期の7世紀後葉～8世紀前葉に比定される。宮崎市においては、これまで土器焼成土坑は、西ノ原遺跡・蕨野遺跡で確認されており、今回が3例目となる。

大塚敷遺跡はこれまで弥生時代の遺跡として周知されていたが、今回の調査では弥生時代の遺構は確認されず、検出した竪穴住居、土坑の状況から、本遺跡は古墳時代と古代の様相が見られた。また33基検出したピットの中には、高原スコリアを埋土に含むものや高原スコリア層上層より掘り込まれているものも確認できたため、中世期においても遺跡の存在が想定される。

本遺跡周辺で住居址は、石ノ迫第2遺跡（弥生時代中期～終末）、間越遺跡（古墳時代5世紀後葉～7世紀前葉）で確認されている。本遺跡における2号竪穴住居は間越遺跡の集落と同時期ないし先出するものと考えられ、生目古墳群の7号前方後円墳の築造年代とも同時期となる。このことから、これらの遺跡は、生目古墳群を造営した人々の系譜の集落として考えることもできるが、周辺一帯で古墳時代前期の住居址は検出されておらず、いまだ生目古墳群のすべての古墳の築造年代とは完全な重複に至っていない。しかし、今回の調査結果より、本遺跡を含むこの地域一帯が数世代にわたって居住域であったことがより確かなものとなった。

今後、この地域は、古墳時代においては南九州の古墳時代を代表する墓域としての生目古墳群というだけでなく、古墳時代前期において、宮崎平野部を掌握した首長を支えた集団の居住域という前方後円墳文化のバックボーン的な視点に立ったアプローチが求められる。またそれ以外では、弥生時代～中世にかけて連綿と人々が住み続ける肥沃な土地であり、この地域一帯が住居址を中心とした複合遺跡であると捉えることが重要と考える。今後の調査に期待したい。

【参考文献】

今塩屋毅行・松永幸寿 2002年「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」（『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料）

今塩屋毅行 2004年「南九州古墳時代の火災－土器利用史に著目して－」（『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』）

表1 遺物観察表

番号	遺物名	種別	材質	部位	法量 (cm)			調整		色調		胎土	備考
					口径	胴径	底径	外面	内面	外面	内面		
1	SA2	土師器	甕	完形	138	84	31.2	ナデ	ナデ・磨おさえ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	径1ミリ粒子含有	外蓋保存済
2	SA2	土師器	高坏	坏部	110			ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径1ミリ粒子含有	
3	SA2	土師器	高坏	胴部		120		ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径1ミリ粒子含有	
4	SA2	土師器	高坏	胴部				ミガキ・ナデ	ナデ・シボリ	褐色	褐色	径1ミリ粒子含有	
5	SA2	土師器	甕	底部			37	ナデ・押圧跡み	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径1ミリ粒子多量含有	
6	SA2	土師器	甕	底部						褐色	にぶい褐色	径3ミリ粒子含有	
7	SC1	土師器	高坏	完形	185	130	14.2	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	径4ミリ粒子含有	
8	SC1	土師器	高坏	坏部	184				磨おさえ	にぶい褐色	褐色	径1ミリ粒子含有	
9	SC1	土師器	高坏	胴部			17.5	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径3ミリ粒子含有	
10	SC2	土師器	甕	口縁-胴部	230	211		ハケ・ナデ	ナデ	にぶい褐色	黄褐色	径2ミリ粒子含有	外蓋部付着
11	SC3	土師器	甕	胴-底部	145			ハケ後ナデ	ナデ・磨おさえ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	胎土	SC7出土遺物と 着合関係
12	SA3	土師器	甕	口縁部	238			ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	径2ミリ粒子含有	
13	SA3	土師器	坏	完形	100	40	4.5			淡黄褐色	褐色	径5ミリ粒子含有	
14	SA3	土師器	瓶	把手部				ケズリ・ナデ		淡黄褐色	にぶい褐色	径3ミリ粒子含有	
15	SA3	須恵器	甕	胴部				タタキ	同心円状当て具	灰黄色	黄褐色	径2ミリ粒子含有	
16	SA3	土師器	坏	完形	158		5.1	ヨコナデ	ナデ	褐色	褐色	径1ミリ粒子含有	
17	SC4	土師器	坏	底部欠損	139			ミガキ	ミガキ	淡黄褐色	淡黄褐色	径1ミリ粒子含有	
18	SC4	土師器	甕	胴部-胴部	164	165		工具ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径3ミリ粒子含有	外面 磨痕あり
19	SC3	須恵器	坏	胴部						褐色	褐色		
20	SC5	土師器	甕	胴部	180			ナデ	工具ナデ・磨おさえ	にぶい褐色	褐色	径4ミリ粒子多量含有	内・外蓋保存済
21	SC6	土師器	瓶	口縁部	29.5			工具ナデ	ナデ・磨おさえ	淡黄褐色	にぶい褐色	径1ミリ粒子含有	
22	SC6	土師器	瓶	把手部				ケズリ・ナデ		黄褐色		径2ミリ粒子含有	
23	SC6	土師器	坏	完形	115		3.9	工具ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径1ミリ粒子含有	内・外面にヘラ印
24	SC6	土師器	坏	完形	124	8.2	3.1	工具ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	径2ミリ粒子含有	内面にヘラ印 外面に木槌痕
25	SC6	土師器	坏	完形	97		4.7	工具ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径1ミリ粒子含有	内面にヘラ印
26	SC6	須恵器	甕	底部		3.6		ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	径1ミリ粒子多量含有	
27	SH1	須恵器	瓶	底部		7.4		回転ナデ・糸切り産	回転ナデ	褐色	褐色	径1ミリ粒子含有	
28	SH1	陶器	瓶	口縁部	154					灰オリーブ	灰オリーブ		胎土



图版1 遺構検出状況



图版2 7号土坑検出状況



图版3 2号竪穴住居遺物出土状況



图版4 1号土坑遺物出土状況



图版5 2号土坑遺物出土状況



图版6 埋甕半截状況



图版7 6号土坑遗物出土状况1



图版8 6号土坑遗物出土状况2



图版9 1号竖穴住居完掘状况



图版10 3号竖穴住居完掘状况



图版11 调查区全体完掘状况1



图版12 调查区全体完掘状况2



图版13 2号竖穴住居出土土器 (第7图1)



图版14 2号竖穴住居出土土器 (第7图2)



图版15 2号竖穴住居出土土器 (第7图3)



图版16 2号竖穴住居出土土器 (第7图6)



图版17 1号土坑出土土器 (第8图7)



图版18 2号土坑出土土器 (第8图10)



图版19 3号土坑出土土器 (第8图11)



图版20 3号竖穴住居出土土器 (第11图13)



図版21 4号土坑出土土器 (第11図17)



図版22 4号土坑出土土器 (第11図18)



図版23 埋甕 (第12図20)



図版24 6号土坑出土土器 (第14図21)



図版25 6号土坑出土土器 (第14図23)



図版26 6号土坑出土土器 (第14図25)



図版27 6号土坑出土土器 (左から第14図23・24・25)



図版28 6号土坑出土土器 (第14図26)

報告書抄録

ふりがな	おおやしきいせき							
書名	大屋敷遺跡							
副書名	防火水槽新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第77集							
編著者名	井上 誠二							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL (0985) 25-2111							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大屋敷遺跡	宮崎県宮崎市大字跡江宮ノ馬場812番地		24-001	31° 57' 07" 付近	131° 23' 38" 付近	2004.5.6) 2004.6.30	73	防火水槽新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大屋敷遺跡	集落	古墳 古代	竪穴住居(3軒) 土坑(7基)		上師器 (甕・壺・高坏・甌) 須恵器 (甕・坏)			

宮崎市文化財調査報告書 第77集

大屋敷遺跡

防火水槽新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年

発行 宮崎市教育委員会